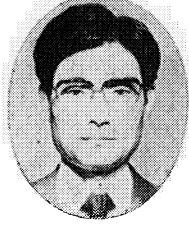


随 想



物 江 清 光

緑濃い田畑に囲まれた豊かな自然環境の中で、十六名の子供たちとともに毎日、落ち着いた平穩な学校生活を送っている。

十六名の子供たちは、それぞれ顔形が違つように性格も能力も体力もみな異なり、多種多彩である。少し注意されただけですぐ涙がこぼれてしまふ泣き虫もいれば、ちょっとしたことでも気がかけて短気をおこし、衝突してしまふ子もいる。しかし、みんな気のいいごく普通の子供たちである。

T男は、算数が苦手である。一度だけの説明ではなかなかのみこめないのので、二度、三度と繰り返して説明を聞かなければならないはめになる。こちらでは、ようやく分かったかなと思つて安心していて、数日たつてから確か

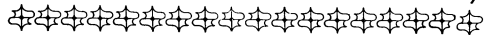
めてみると、あらかた忘れていたことのほうが多い。

S夫は、男の子の中で一番腕力が弱い。ちょっととした意見の対立で衝突が起ると、力では勝ち目がないので、爆発してめちゃくちゃにかかつていくことになる。しかしたいがいは、その体力不足のために打ち負かされて、泣き出してしまふのが普通である。

不得意な教科のあるT男でも、力負けばかりしているS夫でも、不断は学級のみんなとうまくやっているし、感心させられる行動も多く目につく。

T男は、草花の世話をするのが好きであり、得意であり、昨年、三年生のときの理科の学習では、根気強く、継続してへちまの世話をした。

種をまいて芽が出たときには、枯れ



ないように、早く大きくなるようにと一生懸命に水くれをやり、花が咲いて実がつくようになってからは、いくつなつたとか、どのくらい大きくなつたとか、絶えず関心を持って観察をしていた。

こんなT男が、へちまの苗の植え替えるときに、手足がどろだらけになつたことなど気にしなかつたのはいまでもない。

いつも体力負けをしてくやしがつているS夫は、小鳥のめんどうをみるのを忘れない。

普段の日は、わりとのんびり登校するのだが、小鳥の世話をする日となると朝早く来て、正面玄関の前にある小



で っ か い ぞ お

鳥小屋を出たり入ったり大忙しである。友達とにぎやかに笑つたり話したりしながら、小鳥に餌や水をくれてやっている。

子供たちにとって、自らの意志で働きかける場があること、語りかける自然に恵まれていることは幸せである。

ひとはちの草花のめんどうや小鳥の世話であれ、へちまの栽培であれ、どんな些細なことでも、土に親しみ、自然に対して能動的に働きかけることができる場は、人間味豊かな心を培う場であり、問題行動を生み出す場ではないだろうと考える。

「教育の荒廃」という言葉は、いづごろから使われるようになったのだろうか。家出・登校拒否・薬物乱用・家庭内暴力・万引など、児童生徒をとりまく現状は、芳しくない言葉によって表現されることが多い。

憂うべきことが多く、苦労している先生がたが教多いときに、非行などに心を煩わされることなく、学習に遅れて進む子をどのように導いたらよからうかと、それに専心できる幸せを思わないわけにはいかない。

都会には都会の、地方には地方のよさがある。地域や学校の実態を生かした教育とは、ゆとりがありしかも充実した学校生活を送っている子供たちとは、いったいどんな姿なのだろうかと思ふ今日のごころである。

(会津高田町立藤川小学校教諭)